

中国経済はどのように発展し、どこへ向かうのか

加島 潤

経済学部 教授

今や「大国」となった中国の経済を、経済史の視角から研究しています。学部3・4年生合わせて20名程度とともに学んでいます。

中国を中心とした東アジアの近現代経済史を研究しています。ここで言う近現代とは、19世紀半ばの中国の開港から現在までの、およそ180年程度の期間を指しています。19世紀半ばの時点で、中国は多くの人口と広い領土を擁する巨大な国ではありませんが、国民1人当たりで見れば世界の中で必ずしも豊かな国ではなく、軍事的に見ても強国ではありませんでした。しかし、21世紀の現在では、アメリカと並ぶ「大国」として国際的に大きなプレゼンスを誇っています。こうした中国の経済発展がどのように実現し、そして今後どこへ向かうのかということは、非常に興味深いテーマです。とりわけ、同じ東アジアの隣国である日本にとつて、中国経済の来歴と現状を深く理解することは極めて重要であると言えるでしょう。本研究会では、こうした大きなテーマについてさまざまな角度から研究を行っています。

このように書くと、研究会でもつばら過去（近現代とはいえ）の中国経

済について研究していると思われるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。実際、ゼミ生の関心は、リアルタイムで刻々と変化する中国経済の現状や、その日本経済に対する影響にあることが多く、研究会では現代的なトピックも幅広く扱っています。ただ、一見すると新奇に見える事象も、その発生要因は歴史的に形成されていたり、長期的な構造変動の一部だったりすることが少なくありません。それゆえ、本研究会では、現代的な事象についても歴史的な視角を踏まえて分析・解釈することを重視しています。

また本研究会では、中国語の情報の活用にも力を入れています。日本語、英語に加え、中国語での情報にアクセスしそれを活用する力を身に付けることは、研究のみならずさまざまな分野で生かされます。さらに、中国語のナマの情報を通じて中国の政治・経済・社会・文化に触れ、自国とは異なる多角的な視野を得ることも、本研究会の大きな目標の一つです。

交わる探究心、広がる視野

山口芽衣君 経済学部4年

今年5年目を迎える加島潤研究会は、中国に関する基礎的知識を身に付けた人から専門的な研究を志す人まで、個々の関心の幅に応じた学びがある研究会です。香港賭博産業、韓国化粧品産業、シンガポール外資企業参入など、中国はもちろん東アジア地域の産業・経済に関する個性あふれる研究がゼミ全体の学びを豊かなものにしています。これらの研究は日々のゼミ活動を土台としており、今年春には日中高度経済成長比較を行いました。

教授が一人一人を丁寧にサポートしてくださること、のびのびとした雰囲気の魅力だと感じます。ゼミ後には加島教授と一緒に中華料理屋さんへ行くのが恒例になっています。



山林から木材、木造を対象に、エンジニアリングで挑む

しらい ゆうこ
白井裕子

環境情報学部 准教授

山林から木材、木造まで、つまり自然環境であり、生物材料を相手に、これまで疎遠だった工学、エンジニアリングの視座から取り組んでいます。

山林内作業を支援する技術開発については、愛・地球博（2005年）に当時の所属先から開発機を出展した頃から始まり、どの研究も息の長いものとなっており、協力者や共同研究者にも恵まれています。写真は高知の山中へ学生を連れて行った演習の様子です。林業の現場は危険で、近年は山林環境自体も急変しており、必ず現地を熟知する技術者と一緒に行動し、教育でも協力を得ています。担当教員は、どのような実験や解析、開発が必要かという、前段の研究も自分で実地へ行って調べるのが研究者としての特徴です。この研究スタイルが教育にもつながり、学生と共にフィールドに出ています。

学生には受け身ではなくて、自分でアウトプット（研究）するために、インプットしてほしいと思っています。SFCはデータサイエンスにも強く、学生は画像解析やベクトル空間法等を学び、研究に用いたり、また個性的な研究では自然言語処理で林業政策を分析した学生もいます。学部生にも査読論文の執筆を勧めており、論文を投稿して採録になり、学会から学生論文賞を受賞した学生、キャンパス内の学会から卒業研究で金賞を頂戴した学生もいます。また審査に通り、ハンガリーで開催された林業技術の国際会議で発表した学部生もいます。発表したその足で学会の方々と、隣国オーストリアで行われた世界最大級の林業技術の展示会にも参加しました。またドイツのサマースクールに研究会の学生を連れて、国内他大学の教員と参加したこともあります。普段から学生たちの話をよく聞き、学生の思いに沿った研究や活動に取り組んでいます。学生と新たな学会に入ったり、彼らが読みたい本を輪読し、皆で議論したり、学生同士でプログラミング言語を教え合ったりしています。半学半教の精神で、学生も教員もお互いに学んでいます。何より研究が大好きな担当教員の後ろ姿を見て、学生に研究の醍醐味と面白さを感じてもらえたらと思っています。

研究を通じて、自分の考えを自分に問う

たなかかつき

田中克樹君 環境情報学部3年

研究会に入った最初の半年は10課題を通じて、研究の基礎を学びながら、各自の研究を深めます。思考のトレーニングにもなっており、自分の考えを自分に問い、求める知識を獲得しながら、論理的な捉え方を学び、モノの考え方も変わりました。皆で将来の話もし、研究がだんだん自分事になって、お互いに自分の研究をさらに深め、発表し合うことで、専門知識の幅も広がってきました。また春学期のフィールドワークでは、再建中の木造の三重塔の実物を二層まで上がって見学することができ、その塔を建てている宮大工からお話も聞け、貴重な機会でした。とても楽しい研究会です。

